

2025 年6月 26 日

T.Kobayashi

東武亀戸線の沿線を歩いて見る その2 <吾孺篇>

「東武亀戸線の沿線を歩いて見る旅」を繰り返しながら、色々整理や調べ物をしている内に、「亀戸」という所と「吾孺」という所は、地理的にも歴史的にも成立ちが異なることがわかった。

そして、「亀戸」は江東区亀戸となり、「吾孺」は墨田区吾孺（今の立花）となり現代に至っている。学習成果のまとめとして、北十間川より南側は「亀戸篇」とし、北側を「吾孺篇」とすることにした。

【東あずま】

東あずま駅は、昭和3年（1928年）に開設された時には「平井街道駅」だった。昭和20年（1945年）に焼失して廃止になり、昭和31年（1956年）に「東あずま駅」として再開設された。

他所から来た人が戸惑う駅名「東あずま」。「東」も「あずま」も同じ意味と捉える人が多いからだろう。

「あずま」と言う地名の由来は、「吾孺神社」の項に譲ることとし、ここでは触れないことにする。

「吾孺村」に端を発し、「墨田区吾孺」という地名は地元で長く親しまれてきた。その東端にあたることから「東あずま」という駅名が選ばれたようである。

【明源寺】

東あずま駅から踏切を通る道を西に進む。集合住宅を左手にして歩くと、正面に東京スカイツリーが凜としてなかなかの絶景だ。集合住宅の中庭のような所に帝釈堂が建っている。この地に帝釈信仰が浸透していたことを示すものだが、宅地開発が行なわれたときに保存・保護したものらしい。

300～400mほど歩くと左手に立派な山門を構えた寺が現れる。

天文9年（1540年）開山、正式名称は曹洞宗萬年山明源寺という禅寺。一對の仁王像が立つ山門は厳めしく風格がある。

戦災殉難者慰霊の塔があり、その隣の九輪の塔の前には砲弾と鉄兜を模した墓石が飾られていた。

【小村井香取神社】

永萬5年（1165年）の文書によれば、平安時代末期に葛西御厨だったこの地に、香取から移住した6軒の人達がこの地の開拓にあたった。そして、香取神宮の分霊を祀って産土神としたと言われており、小村井村の鎮守として崇められてきた。祭神は経津主大神（ふつぬしのおおかみ）。

北十間川の南岸にある亀戸香取神社があるが、由緒の記述が異なるのが面白い。

小村井駅から、亀戸天神に繋がる道を南南西に歩くと、文花二丁目交差点の手前左側にある。

正面は南側にあるのだが、南北に長い敷地なので、横から入りたくなってしまう。

敷地内に、境内末社なのだろうか三峰神社・天祖神社・稻荷神社などの社が祀られている。

【小村井（おむらい）という地名】

地名の由来は不詳のようだが、応永5年（1398年）の記録には「小村江郷」と記されている。葛西御厨の一部で、室町時代には小村井村と呼ばれていた。江戸湊に面した「小さな入江を持つ集落」で、江戸時代には穀倉地帯として幕府領になっていた。

明治22年に、近隣の村と合併して吾孺村となった。

東武亀戸線の駅の中で最も魅力的な響きを持つ駅名で、個人的には大変気に入っている。
40年余り前になるが、電車を降りて踏切を渡って北側へ5分ほどの所に東武信用金庫の電算室があり、サービス担当責任者として何年か通った。窓から向島警察署の建物が見えた記憶がある。

【吾孀神社】

明源寺の先で明治通りを左折すると、北十間川の手前に吾孀神社がある。北十間川の北岸なのでここは「墨田区吾孀地区」ということになる。

日本武尊が東征の折、上総に渡らんとした時に嵐に遭ってしまった。妻の弟橘姫が嵐を鎮めんが為に自ら生け贄となって水に飛びこんだ。嵐が静まった後に弟橘姫の着衣が洲に打上げられたので、日本武尊が、吾が妻を悼んで「吾孀権現」をこの地に祀った。これが吾孀神社の由緒であり、また吾孀をこの地の地名とした由来として言い伝えられている。

正治元年（1199年）に北条泰時により本殿が造営されたという記録も残っている。

一番奥に入ると「吾孀の森連理の楠」と名が付く立派な楠木があり、江戸名所図会などにも記されていたようだが、枯死してしまい根元だけが残っている。

江戸時代に、住民の願出により隅田川に最後の架橋が行なわれた。吾孀神社への参道になる道筋であることからこの橋に吾妻橋と名が付いた。余談だが、民の願出によるものであることからこの工事費用は願い出た人達が負担することになったらしい。

昭和41年に異変が起きた。吾妻・吾孀の同音地名が混乱をきたすとのことから、「吾孀」という地名が消えて、「立花」という地名に変わった。弟橘姫を祭神とする吾孀神社にちなむものという由緒の説明だった。

「墨田区立花」という町の西側に「墨田区文花」という地名も誕生した。手書きの郵便物が主流の時代には「誤記ではないかと思ったら、ただのくせ字だった」という郵便局員泣かせの地名とも言われた。

【福神神社】

吾孀神社境内の右奥に赤い鳥居の福神稲荷神社が同居している。亀戸四丁目にあった福神稲荷神社が、1922年にこの地に遷座されたと説明があったが、遷座の理由（経緯）は書いてなかった。

赤い鳥居に書いてある文字は「天保九年初午」と読み取れた。

東京大空襲で周辺は大被害を被ったが、この神社は無事だったことからご神徳として注目された。

北十間川に架かる「福神橋」という橋の名前の由来は、福神稲荷神社から来ているらしいが、もっと古い由緒ある「吾孀神社」の名を差し置いて福神橋となったのも面白い。

【大井戸稲荷神社】

東あずま駅から、丸八通りを横切って平井橋に向かって歩く。昔は平井街道と言われたらしい。丸八通りから数分歩いた所で、マンションと民家の僅かな隙間のような所に建つ、朱色の鳥居が目に入ってきた。鳥居には大井戸稲荷神社と書いてあり、一對の狐に守られている。鳥居の脇に説明板がある。

その昔この場所に小さな稲荷の祠があり、そばにある井戸からこんこんと水が湧き出っていて、通行人の喉を潤していたとのこと。平安時代には河口の砂州だっただろうし、江戸・明治・大正の時代には農地が広がるころだったと思われる。駅周辺の区画整理により現在の位置に移転したらしい。説明を読んで見たが、稲荷神社や井戸の出現の時期については触れてなかった。

【北向地蔵尊】

大井戸稲荷神社から平井街道を歩き、平井橋の僅か手前を左折して北に進むと、交差点の北側の角に「北向地蔵尊」がある。私有地の空き地のような場所に建つ地蔵堂は確かに北向きに建っている。地蔵尊の他に塩地蔵もあり、堂宇の外には昭和9年に建てられた無縁仏供養塔がある。関東大震災の時に中川から集めた無数の死体を葬ってあると聞いたことが有る。地蔵がなぜ北向きに建っているのかはわからなかった。

【東漸寺】

北向地蔵尊からさらに北に進むと、道路の右側の堀越しに広い墓地が現れた。寺の正面に回って見たら、北向地蔵尊のすぐそばだった。寺の正式名称は、天台宗金林山明了院東漸寺（とうぜんじ）。1444年（文安元年）僧秀尊が開山、その後宝永年間（1700年代初頭）に円覚上人によって中興された。敷地に踏み入ると、植え込みの中の六地蔵が出迎えてくれた。

【白髭神社】

東漸寺の北側、旧中川を背にして長い参道を従えた白髭神社が建っている。神社の正面の鳥居は、東漸寺の勝手口の目の前だった。1682年（天和2年）、徳川綱吉の時代の創建で、葛西川村の鎮守とされてきた。長い石畳の参道を真北に進むと本殿がある。祭神は猿田彦大神。ここから北西へ約3Km、隅田川に近い東向島3丁目に、もうひとつの「しらひげじんじゃ」、白髭神社がある。こちらは寺島村の鎮守で、向島白髭神社と言われてきた。余談だが、「髭」は口のひげ、「鬚」は顎のひげ、「髥」は頬のひげ。白髥神社は、この界限にはないようだが、長野・山梨・福井などにはあるらしい。

【都立橘高校】

白髭神社から東あずま駅へ戻る途中の、平井街道と丸八通り挟まれた所に都立橘高校がある。昭和13年（1938年）の開校当時は向島工業高校だったが、2007年に都立向島商業高校と統合して、校名は橘高校となった。長く続いた町工場が並ぶ「工業の時代」が終ってしまったような感じがした。この学校がある場所は、「墨田区立花四丁目」、橘高校の南西側にあるのが「東吾孺小学校」、北西の立花五丁目にあるのが「吾孺橘中学校」。吾孺・あずま・立花・橘、古い地名と新しい地名が巧みに織り込まれており、この地の歴史や変遷が想像できて面白い。

【曳舟（ひきふね）】

小村井を出た東武亀戸線は、この線では珍しく1.5Km以上走り続けて終点の曳舟駅に入る。水路に浮かぶ舟を陸から引いて運ぶという交通手段があったことの名残の地名。こういう地名は残して守る必要がある。曳舟川は埋められて道路になってしまったようだが、東武線とうきょうスカイツリー駅の北側に「曳舟川由来碑」があり、新四ツ木橋に向かって北東に走る道路が、昔は曳舟川だったらしい。今は「曳舟川通り」という道路名称として辛うじて残されている。大阪にも「曳舟」という地名があり、また各地の川沿いに「船引」「引船」などの地名が残されている。上京してまだ日が浅い頃、土着（東京に）の人達が「しきふね」と言っていたのが耳に残っている。

【おすび】

4月26日にスタートした「東武亀戸線沿線散歩」は、約二ヶ月続いたところでとりあえず一旦終了。亀戸線の沿線の軽い散歩のつもりだったが、亀戸・吾嬬・向島を巡る大きな散歩になってしまった。江戸市中の高見から東の方を見ると、向こうに見える島が「向島」、その横に亀の形をした「亀島（今の亀戸）」、その南側にできた砂州は「砂村（今の砂町）」、水路を切り拓いた浚渫土の力も借りてできた景勝の地「洲崎（今の東陽町南部）」、河口の島にできた流刑地「佃島」などなど河口の変化の歴史が見えてくる。

そして、関東大震災で発生した大量の瓦礫が埋立てに使われて「豊洲」が生まれ、戦後の復興の中で生まれた生活廃棄物を埋め立ててできた人口島「夢の島」。

古代から現代に繋がる河口の歴史は、読み解いていくと面白いものが沢山出てくる。

以上

●地図を見たい方は「東武亀戸線の沿線を歩いて見る その1」を参照下さい。